

## 海外に見る「過疎化」がもたらす影響(II)

### 研究2

#### —延吉市における「出稼ぎ」の実態と「留守児童」への影響—

張 麗 花

坂 西 友 秀 埼玉大学教育学部

キーワード：出稼ぎ、留守児童、朝鮮族、韓国、心理的影響

### 目 的

中国における親の「出稼ぎ」(留守児童)に関する報道資料や先行研究を見ると、「留守児童」の問題点が多く取り上げられていて、否定的な結果を報告するものが多かった。研究Iの聞き取り対象の女性自身がかつて「留守児童」であり、周りにも大勢の「留守児童」が存在した。自分を振り返り、また周囲の「留守児童」を観察すると、必ずしも彼らが、問題点ばかりを抱えているわけではないことに気づく。親が身近にいないことにより、「留守児童」は、身の回りの生活、たとえば家の掃除や食事の準備を自ら行ったり、手伝ったりする。起床や就寝も自立的に行う。自分の世話をしてくれる親族・親戚に配慮し気遣いをする、等々、「留守児童」の多くは、自立・自律性を強く自覚する。学校生活にしても、帰宅してからの勉強にしても、自覚的に取り組むことが必要になる。本研究では、今まで取り上げられることの少なかった、「留守児童」の積極的な面に焦点を当て、親の出稼ぎが子どもに否定的ないしは積極的影響をどのように及ぼしているのかを明らかにする。

仮説1 「留守児童」は非「留守児童」より「信頼感」、「安心感」、「配慮」、「気づかい」、「自主自立性」や「学習意欲」等が高く、経済面(小遣い等)の計画性をしっかりもち、不満を感じる事が少ない。

延吉市の朝鮮族の子どもが通う小学校で調査を行い、分析し、仮説の検証を行う。

### 方 法

調査期日 2014年3月5日から12日まで中華人民共和国・延辺州延吉市で調査を実施した。実施日は次の通りである。延吉市公立小学校2014年3月6日。

調査対象 延吉市公立朝鮮族小学校(4年生、男子8人、女子14人、5年生、男子12人、女子34人、6年生、男子5人、女子44人)117名を対象とした。無効な回答は分析から除外した。

質問紙の作成 質問紙は、「留守児童」の家庭状況、出稼ぎが始まった時期、父母との関わり、出稼ぎ後の児童の生活、人間関係等について、いくつかのカテゴリーに分けて作成した。まず、家族、養育者、親の出稼ぎの有無、出稼ぎ先等の一般的状況(親が出稼ぎをしていますか(いる・いない)、誰が出稼ぎをしていますか(父親・母親・親両方)、親が出稼ぎをしている国・地域はどこですか(例:韓国))。

また、朝鮮族の学生を対象にするため、質問紙はハングルで作成した。質問紙の内容は大きく

(注)本研究は、2014年度の埼玉大学大学院教育学研究科に提出した張麗花の修士論文に加筆したものである。

2つの部分、細かくは9つの下位部分で構成した。

I 親との関係・保護者・友達との関係について尋ねる項目の作成 以下、項目を例示する。1. 親との関係（①出稼ぎ前の子どもと父母の人間関係（親によく甘えたり、頼み事をしたりした。いつも親は私のことを心配してくれた。お母さんとなんでも話をしていた。お父さんとなんでも話をしていた。お父さんとお母さんは仲がよかった。）②出稼ぎ後の親との関係（電話や手紙など、何等かの手段で常に連絡を取っている。親の期待に応える気持ちをいつも持っている。親と話するときには、心配をかけないように、人からほめられたことなど、いいことだけを話す。親と話するとほっとし、心があたたまる。親と会える日が待ち遠しい。）2. 保護者との関係（出稼ぎ後）、（保護者にいつも安心感を持っている。保護者に何でも相談できる。保護者は私の生活・学習面に興味、関心を持っている。間違っていることをした時は、保護者はきちんとしつける。保護者にいつもとても気を使っている。）3. 友達との関係（「信頼感」・「安心感」・「意思疎通」・「気遣い」）（親がいないことで友達から嫌なことを言われたことがある。なんでも相談できる親友がいる。友達がいるので寂しいと思わない。）

II 自分について尋ねる項目の作成 以下、項目を例示する。1. 生活面（「規律自立性」・「安定性」）（家族と食事をするとき食器やおかずを運ぶ。部屋の掃除をする。自分のことはできるだけ自分でやるようになった。何か困った時はすぐに周りの人に助けを求める。）、2. 学習面（「自主自立の欠如」・「意欲の欠如」）（宿題は人に聞かず自分でやる。わからないことがあるとき、すぐ保護者や先生に聞く。予習や復習をきちんとする。人に言われなければ、自分から予習・復習をすることはしない。）、3. 人間関係（先生とよく話をする。友だちとよく話をする。自分の悩みを親に相談する。）、4. 進路（私には夢がある。自分の夢のために頑張っている。自分の将来の職業（仕事）について真剣に考えたことがある。）、5. 経済面（「計画性」・「不満」）（お小遣いを計画的に使う。貯金をしている。親からお小遣いを充分にもらっている。お小遣いの金額は満足している。）、6. その他（「適応性」）（転校したり、家を引っ越ししたりしても新しいところにすぐ慣れる。親ではない人とは一緒に住み始めた時、すぐ慣れる。環境（親戚の家や新しい学校）が不便でも、自分を環境に合わせる。）。

以上、IとIIで作成した項目計74個に対してリッカート法（5段階、「まったくあてはまらない」～「ひじょうによくあてはまる」）で回答を求めた。

調査の実施 授業の一部で集団実施し、また休憩時間に先生に調査を依頼し実施した。質問紙の回収は、後日学校を再度訪問して行い、依頼した先生を介して受け取った。

## 結 果

### 1 調査対象者の基本的情報

初めに調査を実施した学校の特徴と属性を整理しておく。延吉市公立朝鮮族小学校の調査対象児童の内訳を性別にまとめたものが表1である。女子に比べて男子の人数が少ない。

表1 延吉市公立小学校調査対象児童の性別に見た親の出稼ぎの有無（人数）

	親出稼有	親出稼無
男	15	10
女	58	34
合計	73	44

また、学年別（4、5、6年）に親が出稼ぎに出ているか否かで整理したものが表2である（人数）。4年生の段階で親が出稼ぎに出ている子は約10%（117人中）である。5年生では24%、6年生では28%であり、6年生の時点では全体の約62%の子どもが「留守児童」であることがわかる。学年毎の「出稼ぎ率（%）」は、55、64、65で、4年生で既に5割を越える。

表2 延吉市公立小学校4、5、6、年生の親の出稼ぎの有無

	親出稼有	親出稼無
4年生	12	10
5年生	28	16
6年生	33	18
合計	73	44

また、「留守児童」の親の出稼ぎ先と親の中で誰が出稼ぎに出たのかを整理したものが表3である。父が出稼ぎに出た割合は40%であり、母が出稼ぎに出た割合は25%であり、親両方が出稼ぎに出た割合は35%であった。出稼ぎ先は韓国が83%で、アメリカが8%、日本が1%、ロシアが1%、国内が6%であった。両親の「出稼ぎ」が3分の1以上の割合だ。

表3 延吉市公立小学校調査対象児童の親の出稼ぎ先（国別）

	韓国	アメリカ	日本	中国国内	ロシア	合計
父	23		2	0	3	29
母	13		4	0	1	18
両親	24		0	1	0	25
合計	60		6	1	4	72

親関係、保護者関係、友たち関係 表4は、「留守児童」について親関係、保護者関係、友たち関係15項目について算出した平均と標準偏差である。平均値が3.50未満および3.50以上の項目を見ると、「親に甘える」ことを抑える反面、両親とのやりとりと交信は密に行っている。親と会う日を待ち望み、会話することは子どもの心を和ませ安堵感を与えていることがわかる。保護者との関係も良好に保たれていることがうかがえる。

表5は親関係、保護者関係、友たち関係15項目について因子分析（最尤法、基準化バリマックス回転）を行った結果である。因子を構成する項目を採用する負荷量の基準を0.45に設定した。親との関係や友だちとの交流が良いこと、相手を信頼していることを示す「信頼感因子」、親の不在に起因する「いじめ」や「嫌な体験」をする中で保護者に対する「安心感」を示す「安心感因子」、

表4 親関係、保護者関係、友たち関係15項目の平均値と標準偏差

関係種	項目	平均	標準偏差
親子関係	親によく甘えたり、頼みごとをした	2.48	1.22
	いつも親は私のことを心配してくれた	4.39	1.01
	お母さんと何でも話しをしていた	3.95	1.26
	お父さんと何でも話しをしていた	3.33	1.41
	お父さんとお母さんは仲がよかった	3.84	1.30
	電話や手紙など何らかの手段で連絡をとっている	4.12	1.06
	親と話すときには、心配をかけないように、人からほめられたことなどよいことを話す	3.61	1.27
保護者関係	親と話をするとほっとし、心があたま	4.05	1.19
	親と会える日が待ち遠しい	4.22	1.25
	保護者にいつも安心感をもっている	4.13	1.25
	保護者に何でも相談できる	3.71	1.25
	保護者は私の生活・学習面に興味関心をもっている	4.27	1.17
友人関係	間違っていることをしたときは、保護者はきちんとしつける	4.06	1.17
	保護者にいつもとても気をつけている	3.62	1.52
	親がいないことで友だちから嫌なことを言われたことがある	1.50	1.04
	いじめを受けた経験がある	1.42	0.91
	何でも相談できる親友がいる	3.92	1.45
友だちがいるので寂しいと思わない	3.97	1.42	
友だちの家に行って遊んだりする	2.76	1.47	

(注) 1～5の5段階評定

表5 親関係、保護者関係、友たち関係15項目の因子分析

	項目	信頼感	安心感	配慮安堵	気づかい
信頼感因子	お母さんと何でも話しをしていた	<b>0.59</b>			
	お父さんと何でも話しをしていた	<b>0.88</b>			
	友だちがいるので寂しいと思わない	<b>0.59</b>			
	お父さんとお母さんは仲がよかった	<b>0.47</b>			
	何でも相談できる親友がいる	<b>0.48</b>			
安心感因子	保護者にいつも安心感をもっている		<b>0.53</b>		
	いじめを受けた経験がある		<b>0.95</b>		
	親がいないことで友だちから嫌なことを言われたことがある		<b>0.59</b>		
配慮安堵因子	親と会える日が待ち遠しい			<b>0.86</b>	
	親と話すときには、心配をかけないように、人からほめられたことなどよいことを話す			<b>0.52</b>	
	親と話をするとほっとし、心があたまる			<b>0.61</b>	
	いつも親は私のことを心配してくれた			<b>0.50</b>	
気づかい因子	保護者にいつもとても気がつかっている				<b>0.49</b>

両親に心配させまいとする配慮と親の愛情に接する安堵感を反映する「意思疎通因子」、さらに親ではない「保護者」への気づかいを表す「気遣い因子」の5因子を抽出した(表5)。「留守児童」の人間関係が、「両親」「保護者」「友だち」の三者の緊張関係の中で維持され、両親には心配させまいと気を遣っている「留守児童」の様子が読み取れる。

## 2 「留守児童」と「非留守児童」の違い

まず、小学生を親双方または片方が出稼ぎに出ているか否かによって「留守児童」グループと「非留守児童」グループに分けた。

質問紙調査した74項目について因子分析と主成分分析を行い、「信頼感」・「安心感」・「意思疎通配慮」・「気遣い」の各因子(既述)と「規律自立性」・「安定性」・「自主自立の欠如」・「意欲欠如」・「人間関係」・「進路」・「計画性」・「不満」・「適応性」の13カテゴリーにまとめた。「留守児童」グループ・「非留守児童」グループの各カテゴリーの平均値と標準偏差を表6にまとめた。

表6 「留守児童」と「非留守児童」の各因子の平均値と標準偏差

項目	信頼感	安心感	意思疎通配慮	気遣い	規律自立性	安定性	自主自立の欠如	意欲欠如	人間関係	進路	計画性	不満	適応性
留守児童	3.66 (0.99)	2.39 (0.59)	4.10 (0.76)	3.42 (1.03)	3.33 (0.85)	2.40 (0.78)	3.36 (0.80)	3.21 (1.07)	3.56 (0.93)	3.98 (0.89)	3.63 (1.00)	3.82 (1.06)	3.36 (1.20)
非留守児童	4.21 (0.65)	2.33 (0.58)	4.19 (1.03)	3.67 (1.03)	3.38 (1.07)	2.57 (0.94)	3.60 (0.95)	3.13 (1.07)	3.80 (0.91)	4.38 (0.79)	3.85 (0.88)	3.61 (1.09)	3.51 (1.07)

親が出稼ぎしているかどうかによって、「留守児童」と「非留守児童」の適応性・計画性・自主自立性・意思疎通の面で違いがでるかを吟味するために、親の出稼ぎの有無を独立変数、適応性・計画性・自主自立性・意思疎通等の因子を従属変数にして、それぞれt検定を行った。検定の結果、「留守児童」グループと「非留守児童」グループの間には、「信頼感」因子において2%の水準で有意差( $t=5.92$ ,  $df=65$ ,  $p<0.01$ )が見られた。他の項目は有意ではなかった。したがって、「非留守児童」グループは「留守児童」グループより、両親と何でも話し、何でも相談できる友だちがいると回答する傾向が強い。前者は親や友人に対する信頼感が高いことが明らかになった。

また、「留守児童」は、「非留守児童」比べて、勉学に対する自主自律性が小さいことが示唆されている( $t=-1.73$ ,  $df=108$ ,  $p<0.09$ , 表7)。有意傾向が認められた項目について如何に記す。

さらに、「留守児童」は、「非留守児童」比べて、進路や将来に対する希望、展望がはっきりしていない、あるいは小さい可能性が示唆された( $t=-1.72$ ,  $df=108$ ,  $p<0.09$ , 表8)。「留守児童」は、「非留守児童」よりも将来の夢を自覚したり、職業について考えたり、行きたい中学・高校につい

表7 勉学の自主自律性

項目
<ul style="list-style-type: none"> <li>・宿題は人に聞かずに自分でやる(逆転・自分ではやらない:以下同様)※</li> <li>・家や図書館で、自分から進んで勉強したり、調べ物をしたりする※</li> <li>・自分で買ったり、図書館から借りて、よく本を読む※</li> <li>・わからない問題があるとき、しばらくは自分で考え努力する※</li> <li>・予習や復習をきちんとする※</li> </ul>
※すべて逆転項目である

表8 進路項目群

項目
<ul style="list-style-type: none"> <li>・私には夢がある</li> <li>・自分の夢のためにがんばっている</li> <li>・自分の将来の職業(仕事)について真剣に考えたことがある</li> <li>・行きたい中学校や高校がある</li> <li>・尊敬する人がいる</li> </ul>

てイメージすることが弱いようだ。

## 考察

延吉市は自治州にあるが、教育内容は国の基準に沿っており、朝鮮族独自の教育を行うわけではない。訪問した小学校は、新築工事のため、隣の区画にある他所へ移転した中学校の空き校舎に仮住まいしていた。3月とはいえ校庭の日陰はカチカチの分厚い氷で覆われていた。砂埃がかかり、一見地面と区別がつかず、慣れない者には滑りやすく危険だ。前述の調査は、体育の先生にお願いした。

小学校の教育現場から見えるもの 子どもの様子、教室の雰囲気は、日本と変わらず、元気に動き回る子、友だちと話す子、椅子に座っている子、それぞれである。廊下には、「交通安全」「火災に注意」「進んで読書」等のテーマで子どもたちが描いた絵が展示されていた。昼食時には、子どもたちが、嬉しそうに給食を教室に運び、昼食の用意をしていた。学校は、落ち着いた雰囲気にある。

4年生から6年生までの合計117人の児童の調査結果を見ると、親の「出稼ぎ」が多いことがわかる。男女別、学年別に「親が出稼ぎに出た」経験の有無を集計すると、全体では「経験有り」の児童は男子15名・女子58名、「経験なし」は男子10名・女子34名だった。学年別では、「経験あり」の児童は、4年生12名(56%)・5年生28名(67%)・6年生33名(65%)、「経験なし」の児童は、それぞれ10名・16名・18名であった。学年が上がると、親の出稼ぎが6割強に増える。「留守児童」が一般化している実態と流動化する地域の実情が、数値から想像できる。しかも、小学校段階で過半数の子どもが、両親または片方の親と別れて生活せざるを得ない。事例研究からも分かるように、親特に母親が小学生の頃に「家にはいない」ことは、子どもにとっては大きなストレスを日常的に受けることになる可能性が大きい。本研究においても示されているように、何年もの間顔を合わせず、心身ともに大きく成長した子どもが親と再会するとき大きな「違和感」を感じている。親の出稼ぎ期間中の子どもとの接触の仕方、コミュニケーションの取り方、あるいは「留守児童」を預ける親戚等の保護者・養育者との連携のありようによって、子どもへの影響は大きく異なるであろう。様々な積極的な心理的な効果があるにしても、6割もの小学生が高学年段階

で親と離れて生活することはある意味で深刻である。

「留守児童」と非「留守児童」 小学校の調査から、「留守児童」と非「留守児童」の間に3つの面で違いがあることが示唆された。有意な違いが認められたのは、両親と暮らす子は、「留守児童」に比べて両親でも友だちでも何でも話すことができ、信頼感が強いという一点であった。他の二点は、両親と生活する子は、進んで勉強し、自分の進路や職業について考える傾向が、親と離れて暮らす子よりもやや強かった。本研究では、多くの側面について両児童の違いを検証したが、大きな違いは一点のみであり、両者の間の違いは少ないといえよう。一般に「留守児童」については、否定的な問題が論じられことが多い。

有意ないしは有意傾向にある結果は、親の「出稼ぎ」が、「留守児童」に及ぼす消極的ないしは否定的な影響を与える可能性を示唆するともいえるが、解釈には注意が必要だ。今回の研究では、家を離れている親と「留守児童」との関係の良好さや連絡・コミュニケーションの仕方、あるいは留守家庭（実の親以外の親戚に預ける場合もある）に対する親の配慮や連絡調整の手厚さなどの違いが、「出稼ぎ」の影響をどのように左右するのか検討していないからである。研究1の事例でも示したように、朝鮮族では親戚も含めた親密な人間関係・交流が営まれ、「出稼ぎ」による親の不在を良好に補っていることがある。「留守児童」と両親の関係を考慮しなければならない。

一般に「留守児童は、父母が都市部に出稼ぎに行き、農村に残された子どものこと。満足な教育や養育を受けられないケースが多く、貧困問題の象徴になっている」（朝日新聞、2016）。延吉市の場合は市街であり、いわゆる農村部から上海などの都市部に親が「出稼ぎ」に出る「留守児童」問題とは、質的に大きく異なることに注意しなければならない。

中学生と「親の出稼ぎ」 本研究では公立小学校の「留守児童」に焦点を当てた。小学校高学年で、親の「出稼ぎ」が6割強の子ども当てはまることが明らかになった。学年が上がり、生活能力が高くなる中学生では、両親の「出稼ぎ」は一層進行することが予想される。そこで小学校と同様の質問紙調査を延吉市の公立中学校にお願いし、実施した（2014年3月6日）。初めに、調査結果の概要を述べる。調査対象者は中学1年生69名（男子30名、女子39名）である。両親の出稼ぎの有無は、男子では「出稼ぎ中」25人、「出稼ぎなし」5人で、女子ではそれぞれ32人と7人だった。69名の生徒のうち57名は、親が「出稼ぎ」していた。実に83%の親が出稼ぎをしている。さらに両親（父母）のどちらが「出稼ぎ」に出ているのか、内訳を詳細に見た。男子では、父7人、母5人、両親13人で、女子ではそれぞれ9人、7人、16人であった。生徒の性差はなく、両親とも家を離れている割合が一番高く51%に及んでいる。「出稼ぎ」先は、韓国がほとんどで、男子22人、女子32人、アメリカが各1人と0人、日本が2人と0人だった。「出稼ぎ」先の95%は、韓国だ。親が留守の間、子どもの養育・世話を担うのは誰であろうか。生徒の性別による違いは認められず「祖父母」が最も多く26人、母親13人、家政婦10人、父親7人、親戚7人の順である。1人だけ教師から養育を受けていると回答している。小学生同様、「出稼ぎによる親の不在」が生徒に及ぼす否定的影響は確認されなかった。

「出稼ぎ」が思春期の中学生に悪影響を及ぼすとしたら、学校内の生徒の言動、人間関係さらに教師との関係等に反映することが予想される。以下、調査をお願いした先生と校内の守衛室の職員に伺った話を織り込みながら、延吉市の朝鮮族の「出稼ぎ」（過疎化・人口減少の問題でもある）と「留守児童（生徒）」について考察する。

中国は2学期制で、1学期は9月1日から翌年2月中旬、2学期は2月中旬から7月中旬までである。義務教育は、小学校6年間、中学校3年間の計9年間だ。教科の区分は日本とほぼ同じで

ある。延吉市朝鮮族学校では、ハングルが使用されている。

中学校教育の現場から見えるもの 中学校での親の「出稼ぎ」の実態を知るために、市内の朝鮮族の中学校を訪問した。小学校同様、門で守衛に入校の許可をもらい記帳後に校庭に入った。校舎入り口の手前に、教育方針・活動内容が描かれたカラフルなポスターがガラスケースでできた掲示板に貼ってあった。学校創立の歴史、学校の概要が記されている。隣には、「中学校成果展示」があり、模範学校、先進学校、先進基準党組織、実験学校、先進単位等の文字が並ぶ。並列して、「2013年延吉市優秀教師」として、女性4人の民族衣装で正装した写真が大きく掲示されていた。政治教育、思想教育、道德教育、法政教育、心理品質教育の5つが挙げられ、「心魂」の德育教育「心灵的德育」教育を目指している。健康教育の推進が謳われ、火災時の救急対応もわかりやすく図解している。国の強力な指導の下、地域や学校の優れた取り組み、実績作りが奨励されていることを伺わせる。

学校内の子どもたち 親の「出稼ぎ」は、中学校ではさらに割合が高くなるという。「出稼ぎ」が子どもに負の影響を及ぼす可能性が危惧されていることは本研究の最初の問題部分で触れた。出稼ぎが一般化している中学校では、生徒に特徴的な様子、あるいは落ち着きのない状態や粗野な行動が観察されているのであろうか。調査を依頼し、親切に対応してくれた、数学担当の男性教師（権先生・仮名）に学校の様子と子どもについて話を伺った。

先生の話のを要約しよう。生徒数は約500名で、落ち着いた雰囲気であり、問題が起こる学校ではない。問題を起こすような生徒は、他の学校に行くか、専門学校に進むことが多いとのことだ。「いじめ問題は、ないことはない。女子生徒が強く、彼女たちの間で起こることがある。文化が韓国に似ていて、女性に勢いがあるからかも知れない。子ども達の成績が上がったときは嬉しいが、勉強しないときは残念に思う。生徒と話すのは、思春期だから難しい。特に女子とは難しい」と先生は語る。

生徒は、1年生の時に日本語に少し触れるが、特別な日本語の授業はない。朝鮮語と中国語を習う。授業は朝鮮語で行っている。中国の歴史は教えるが、韓国の歴史は教えていない。教職員は、校長、教頭、アシスタント、合わせて70名くらいだ。学校近くに、延辺師範大学と延辺大学があり、9月から10月には実習生が来る。1、2年生の教員室は2階にあり、各科約10人の先生で構成する。教育実習の期間も生徒に取り立てて問題はない。

教師と生徒の関係 職員室は合同であるが、教員は、一人一人コンパートメントに分かれている。コーヒーマシンがあり、休み時間には自由に飲むことができる。職員会議は、週1回水曜日に開く。3階は3年担当の教員室になっている。各教員の机にはパーソナルコンピュータ(PC)が設置されている。PCの授業があるからだそうだ。体育の先生は男性のみである。授業は、男女に分け、同じ時間に同じ場所で男女に分かれて行う。体をほぐす程度の体操の時間のようだ。朝鮮族のこの中学校では、女性教員が多いという。

先生から伺った学校の様子では、生徒の荒れた行動はなく、親の「出稼ぎ」による生徒への消極的な悪影響はない。実際に体育の授業を見せていただいたが、皆明るく授業に参加していた。職員室の教員も作業をする先生、談笑する先生と思ひ思いに過ごし、自由な雰囲気を感じた。親の「出稼ぎ」による「留守生徒」が大半を占め、こうした状況に対応した家族、地域、そして学校の取り組みが進められているからであろうか。

「出稼ぎ」と「留守生徒」 出稼ぎに出る親は多い。生徒の9割近くが、「留守生徒」に該当する。親の出稼ぎに配慮して、生徒に特別な話をする時間を設けているか尋ねると、「留守児童」が一般

的な状態だから、学校で特に取り上げることはない。親に限らず、若者の延吉市から他所への移動は増えているという。最近では、韓国だけでなく、中国国内の北京や天津、上海など大都市に就職するケースも多い。地元には戻ってこない。帰って来ても仕事がないからだ（日本の地方の過疎化、人口の大都市への集中と共通している）。権先生は、以前は高等学校に勤務していた。年々朝鮮族の子どもの数が少なくなり、高校の学校数も減少してきた。そのため、高校教員から中学校教員に変わり、今この中学校に勤務している、と話してくれた。延辺州、延吉市の朝鮮族全体の動向、社会的状況に学校教育が大きな影響を受けていることを示している。

出稼ぎの実態について権先生は、次のように話す。「子どもの95%の親は、韓国に出稼ぎに行きます。他の国にも行きますが、少数です。片方の親が、韓国に行く場合が多く、子どもは時々親の出稼ぎ先に遊びに行きます。どの子の親もみな出稼ぎに出ているので、取り立てて配慮した教育をすることはありません。出稼ぎが始まったのは、1980代から1990年代にかけての頃からです。ここ延吉では稼げないからです。延吉市は消費の都市・街なのです。生徒は、まだ中学生で「未熟」だから、自分が将来どうしたいのか、はっきりとはわからないんですね。子どもの中には、寂しい思いをしている子はいらっしゃいます。親が出稼ぎに出て、家にいないわけですから。影響はあると思います。両親が出稼ぎに出ている場合、子どもの成績が芳しくないことがあります。小学校の頃から、心の痛みがあるし、心理的に問題を抱えることがあると思います。家族に問題があるとき、それが子どもに悪影響を及ぼすのではないのでしょうか」。しかし、家族の結びつきは、以前からあったし、今でもあると権先生はいう。家族のまとまりや親族の関係は、今も昔もあまり変わらないということである。朝鮮族は、兄弟姉妹、従兄弟・従姉妹、親戚の間で親密な交流をし、大家族的な人間関係を大切にしている。祖父母に育てられる子が多い。安心して家庭・学校・社会で子どもたちが日々を送ることができるのは、親密な「大家族」が今も生きているからだ。

小学校及び中学校の調査を通じて、延辺州の朝鮮族の人の海外とりわけ韓国への「出稼ぎ」が多い現状は把握できた。今回は延吉市の小学校と中学校に限定されるが、それにしても9割の中学生が「留守児童」に該当する状況は日本では想像だにできない。急速な人口の減少がもたらす様々な影響は、地域社会の将来を左右することにもなる。人口の減少、人口の流出という点では、日本各地の人口減・過疎化の問題と共通性があり、改善の糸口を探る参考になる。

#### 引用文献

朝日新聞デジタル（2016）「留守児童5千万人減」中国政府発表に疑問の声が続出  
11月15日19時33分 (<http://www.asahi.com/articles/ASJCC5638JCCUHB1025.html>)]

(2017年10月26日提出)

(2017年11月18日受理)



## **Influence of depopulation on children (overseas case) (II)**

Research 2

China • Yanbian Korean Autonomous Region Yanji City

- The actual state of “migrant” in Yanji city and its influence on “away child”

**ZHANG Lihua**

**BANZAI Tomohide**

Faculty of Education, Saitama University

### **Abstract**

The purpose of this study is to clarify the actual situation and the influence of absence of parent on elementary school students in Yanji city in Yanbian Korean autonomous region located in the northeastern part of China by questionnaire survey. 117 elementary school students of grade 4, grade 5, and grade 6 asked for answers about “parents’ migrants”. The point that seems to be characteristic is that at the elementary school grade level, the proportion of “parents” migrant workers” exceeds 60%.

In addition, there are a lot of children whose both parents go out as “migrant workers”. The rate of children whose parents are not at home for years are 35%. More than 1 in 3 student has lived without their parents. In general, it was recognized that the absence of parents had a negative effect on children. We also asked a teacher in public junior high schools in Yanji city to administer the same questionnaire as the one in elementary school. As in the elementary school, the influence of parent’s absence on children was not recognized. The point to watch out is that in junior high school, parents’ migrant rates are going to increase further.

However, in the case of Yanji city, immigration of parents is occurring in urban areas. It is necessary to understand that there are big differences between “migrant workers” in urban areas and so called “farmers’ workers” in rural areas. The interesting thing is that the relationship between parents is supplemented by the relatives, and they play big role. In Yanjin city, the human relationships responsible for nurturing are maintained soundly. There is a difference in the structure of society and the school system between China and Japan. So, it is not so easy to compare the depopulation problem in Japan with the one of . Yanjin city However, the declining birth rate of Japan and the population decline of Yanbian State are in common, which is an important material for considering the future of Japan.

**Keywords:** Yonban Korean autonomous state, away child, parents’ migrant, depopulation, development of child